

【報告】特別支援学校高等部の実践

このコーナーは教育や、保育・療育あるいは福祉の現場、その他さまざまな現場の実践や運動を取り上げ、その報告を掲載する。報告のどこに注目したか、学ぶべきこととして受け止めたか、読者とともに考えたい。

実践に学ぶ

生徒と考える津久井やまゆり園事件

埼玉県・特別支援学校教員 櫻井 宏明

1 はじめに

本校は埼玉県西南部を校区とする肢体不自由の特別支援学校である。通学している子どもたちのほとんどは知的障害を併せ持つ重複障害の子どもたちだが、少数ながら肢体不自由のみで「標準的教育課程」を履修する児童生徒もいる。

私の担当する高等部Dグループの4名(男4名)もそうした生徒である。このうち3名は筋ジストロフィーで電動車椅子を利用、1名は脳腫瘍の後遺症による高次脳機能障害でクラッチ歩行である。全員が中学部あるいは高等部になって本校に入学してきた。

(1) 生徒たちは動揺していた

2016年7月26日の未明に、神奈川県内の知的障害者入所施設に元職員の男が侵入し、入所者を刺して19名を殺害し、26名に重軽傷を負わせる事件が起きた。容疑者は凶器を持って警察に出頭したが、元職員であったこと、「重度の障害者は抹殺したほうがいい」という旨の供述をしていることなど、社会に大きな衝撃を与えた。

Dグループでは夏休みと冬休みに補習を行っている。補習では、経験を広げる目的で外部から講師を招いて書道教室や写真教室など普段できない体験も行うことにしている。

昨年(2016年)の8月、補習のために登校し

た生徒たちは動揺していた。生徒たちの主なニュースソースはウェブかテレビなので、断片的な情報しか入っていなかった。そうした断片的な情報だけでは、重症の障害者だけをねらったこの「特異な」事件をどう考えていいのか整理できないでいた。私自身も「特異な人間の特異な事件としてはいけない」とは思ったものの、うまく説明できなかった。

(2) 障害に向き合うことは青年期の課題

思春期から青年期は「第二の誕生」の時期といわれ、仲間の中で自分を見つめ、古い自分をこわし、新しい自分をつくるための模索と葛藤の時期である。肢体不自由の生徒たちには、身近に同じような障害の仲間や自分のモデルとなる先輩が少ないことなど、特別な困難がある。

そこで、Dグループでは、授業や行事を通して、仲間とともに自分を見つめ将来を考えるとりくみを大切にしている。この事件を学ぶことで生徒それぞれが「障害」に向き合い、自分を見つめる一環になればと考え、授業で取り上げたいと思った。

2 授業の概要

(1) 手探りで授業をスタート

津久井やまゆり園事件から1ヵ月が経ち、事件をめぐる様々な論点が出され、一定の整理がされてきた。一緒にグループを担当する同僚と相談して、2学期に事件の学習をすることにした。

Dグループでは自立活動として、肢体不自由な

ので身体に関するとりくみ、日常生活のスキル向上などのとりくみだけでなく、週2時間の「グループ」という授業を設けている。この「グループ」では社会性を高めることをねらいとして、①学部行事の企画・立案などを通じて企画する力や話し合いの仕方を学ぶこと、②年3回のグループの校外行事の事前事後学習を通じて、公共交通機関や施設利用の方法を学ぶこと、③卒業後の生活をイメージできるように進路学習(日中活動の場、夜間の生活の場、余暇の過ごし方、福祉制度の学習、自己理解など)などを学習の柱としている。

津久井やまゆり園事件の学習は、年間計画にはない年度途中ではじめた授業である。2学期には宿泊行事や運動会、社会体験学習、産業現場等での実習などが予定されていたので、そうした行事に関する学習の間をぬって計画を立てなければならなかった。きっちりとした計画が立たないまま、とりあえず授業で使う資料(ここでは省略)を作成し、あとは授業での生徒の反応を見ながら試行錯誤しながら授業を進めることとしてスタートさせた。授業の概要は表1に示した通りである。

(2) 授業で大切にしたいこと

授業を行うにあたって、私は生徒それぞれが自分で考えて、自分の意見が持てるようになってほしいと考えた。したがって、私たちの意見を押しつけるのではなく、できるだけいろいろな意見と出会わせたいと思った。そこで、新聞などに発表されたいろいろな人や団体の多様な意見・見解を紹介するようにした。

Dグループの生徒は少人数で、他グループにはディスカッションできる生徒がいない。家庭や地域での人間関係も限られている。とりわけ同世代の者とふれ合う機会は少ない。そこで、何らかの形で同世代の者の意見を紹介したいとも思った。

(3) 最初の授業での生徒たちの感想(※1)

授業は新聞の切り抜きなどの資料をもとに事件を振り返ることからはじめた。どの生徒も事件については知っていて、関心もあった。

次に、生徒の感想を聞いてみた。早とちりや誤解をすることも多いが、差別的な発言には人一倍敏感な1年生のAは、「驚いた。失神しそうだった」「施錠していたけれど警備を増やしたら」と感想を述べた。

母親が障害者施設の厨房で働いている3年生のDは「障害者がいなくなればいいといっているが、障害者として生まれたいからわからないのではないか。人間として最低だ」と怒りをあらわにした。その上で、「(職員増は)予算がかかるからむずかしいだろう」と警備強化の限界について付け加えた。

中学校までを地元の学校で過ごし、古風で厳格な父親に育てられた3年生のCは「びっくりした。怖かった。(考え方が)ただ事ではない(と思った)。ただ、容疑者の主張を支持する人もいるだろうなと思った」と語った。

日頃からネットサーフィンを楽しみ、いつもクールな2年生のBはネット上の反応を紹介したが、この時点で自分の感想を語ることはなかった。

(4) 生徒たちの心をゆさぶる

2時間目には資料をもとに論点を整理し、問題点を確認した。その上で、用意した「相模原事件を考える」というワークシートに自分の意見を書かせることにした。授業の中で意見を聞いても、すぐに発言できない生徒もいる。自分で考えて書くことで、各自が自分の意見を持ってほしいと思ったからである。

今回の事件が提起している問題を自分のこととして考えてほしかったので、ちょっと刺激的かもしれないが、私から生徒に「みんなが乗っている車椅子の値段は軽自動車1台分ぐらいするけれど、『税金も払わずに、私たちの税金でそんな高いものを買って』と言われたらどう反論する?」と質問を投げかけた。